

Title	学校史展示における節度と積極性： 福沢諭吉記念慶應義塾史展示館開設における模索
Sub Title	Moderation and proactivity in the exhibition of school history : what we sought in establishing Fukuzawa Yukichi Memorial Keio History Museum
Author	都倉, 武之(Tokura, Takeyuki)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2022
Jtitle	近代日本研究 (Journal of modern Japanese studies). Vol.38, (2021.) ,p.149- 180
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：学校史の展示とその展開
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20210000-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学校史展示における節度と積極性

——福沢諭吉記念慶應義塾史展示館開設における模索——

都 倉 武 之

はじめに

二〇二二年七月五日、慶應義塾図書館旧館（通称旧図書館）に「福沢諭吉記念慶應義塾史展示館」^{〔1〕}（以下「塾史展示館」と呼ぶ）が開設された。塾史展示館は、慶應義塾の創立者である福沢諭吉の生涯と、慶應義塾の一六〇年以上の歩みを展示することを通して近代日本、ひいては現代社会のあり方を再考する場として企画されたものである。

ここにち、日本国内の諸大学では自校史を展示する施設を設ける動きが活発であり、たとえば、いわゆる東

京六大学においても、この十年で立教学院展示館（二〇一四年）、早稲田歴史館（二〇一八年）、HOSEIミュージアム（二〇二〇年）が次々に開館した。

この三館が、どのような点に設置の意義を見出しているかをみてみよう。

立教学院展示館の場合、そのホームページ冒頭に「立教の歴史と伝統、教育と研究の取り組みを発信する場⁽²⁾」と簡潔に記されている。また同館館長は「この展示館は、歴史の歩みを感じ、過去を想起しつつ、新たな未来を創造する場」とし、同館の構想委員会の顧問を務めた寺崎昌男は展示の特徴として「二つのキーワード」を挙げ、「一つは『総合性』」として「大学院、大学、二校の中学校・高等学校そして小学校、さらには校友や保護者、そして地域の人々を含めた『オール立教』のものだ、ということである」と記し、「第二に『自校教育』⁽³⁾」としている。

早稲田歴史館は、名誉館長の名義で次のように記している。

本学の来歴に係る資料の陳列はもとより、グローバル・ユニバーシティとして発展し続ける姿を可視化し、来館された方々が自身の関心に応じて、常に新たな発見ができるよう更新していくことで、建学以来の個性と存在意義を発信していくことをめざしています。本学の過去と現在、そして未来を直に体感しながら、時代や世代を超えて「早稲田らしさ」や早稲田の誇りを感じていただければと願っています。⁽⁴⁾

HOSEIミュージアムの場合も、ホームページに館長の名義で、次のようにある。

このミュージアムは、本学学生・生徒の皆さんが法政大学の豊かな歴史と個性を学び、また卒業生の皆さんが学生時代をふりかえりながら、ともに未来を展望するための場です。そして本学関係者以外の皆様にも、法政大学の姿を通じて、大学が社会に存する意味と価値をとにも考えていただきたいと願っております。⁽⁵⁾

右三館、特に早稲田と法政の開設趣旨に共通して見られるのは、重ねられた個性的な歴史と伝統を確認する場であること、在学生および卒業生だけでなく一般に広くそれを示していくこと、多様な教育・研究事情を発信すること、そして未来を展望することなどを謳う点であろう。立教学院展示館の英語名称が *The Heritage and Future of Rikkyo*、早稲田歴史館は *Waseda University History for Tomorrow Museum* とつうように、二館にはそれぞれ *Future* と *Tomorrow* の文字が入れられ、単に過去を回顧するわけではない点が強調されていることも象徴的である。

教育機関内の事務部門が担当していることが多い学校史の分野は、真理探究という学術研究の側面と、学生獲得のための広報宣伝の側面の間で常に葛藤を続けていくことを宿命とせざるを得ない。しかし大学全人時代といわれるようになって久しい現在、学生獲得という直接的な意味に加え、ブランドイメージの向上といった、より長期的かつ広汎な視野での広報的側面が強く意識されるようになってきているとも感じられる。⁽⁶⁾

この状況は、学問分野としての大学史・教育史の学問的深化という視点からすると、負の側面が多いように考えられがちであるが、筆者はこの状況を、展示という行為の社会的意義という点からは、むしろ積極的に捉えたい。それぞれ固有の理念を有する私立の教育機関において、その理念を世に広く問う機会は、基本的に歟

迎されるべきであろうし、それが本来の理念の実現に近づく行為でもあるはずだからである。一方でそれは独善に陥る可能性も大きく、その内容は、常に抑制的な視座からの点検の対象でなければならぬであろう。塾史展示館はその点を意識して開設準備を進めた。

本稿は塾史展示館の開設を契機として、展示を、何のために、誰のために、何を展示していくか、という検討の過程で留意した点を概観し、学校史展示の持つ意義について考察を加えるものである。

一 塾史展示館開館前史

まず、慶應義塾史の展示施設を設置する議論が、これまでどのように推移したのかを確認したい。このことは、慶應義塾において自校史の展示がどのように意義づけられ、どのような優先順位に置かれていたかを明らかにしてくれるからである。⁽⁷⁾

慶應義塾において福沢諭吉の生涯や慶應義塾の歴史を展示する施設の構想が具体的に提起されたことは過去に複数回あった。左にそれを列挙し、その背景を検討してみよう。

- ① 小泉信三塾長時代の一九三七年頃。かねてより指摘されていた三田キャンパスの狭隘化の問題を解消するため、本部機能と大学本科（学部）等の高等教育機能のみを三田に残して文系学術研究の拠点とし、他の大部分の教育機能を日吉に移転し教育の拠点とする、組織の全面的な再配置が進められていたとき、三田に福沢の記念館機能を含む「文化博物館」の構想が進められていた。⁽⁸⁾この時は、キャンパス機能の全面的な再検討のタイミングであったこと、一九三四年の日吉キャンパス開設に伴って行われた発掘調査により

考古学分野で当時画期的な発見が相次いでいたため、その文化財展示も課題であったこと、日中戦争の勃発や国家総動員体制の強化により、福沢の思想を功利主義、個人主義などとして批判する風潮が強まりつつあり、福沢の思想を対外的に積極的に発信する必要性があったことなどが計画の背景としてあげられる。⁽⁹⁾しかし、この時は戦時体制による物資統制の強化により、研究機能強化のための研究室建設計画と共に幻に終わる。⁽¹⁰⁾

② 潮田江次塾長時代の一九五〇年頃。戦災からの復興の一環で福沢記念館構想が浮上する。⁽¹¹⁾戦後、福沢思想が再評価され、慶應義塾自身においても理念の確認と再興が意識されたと考えられる。しかし研究室不足の主張が勝ち、第二研究室（ノグチ・ルームを含む新万来舎）の建設に変更された。

③ 奥井復太郎塾長時代、一九五八年の義塾創立一〇〇年に伴う福沢論吉展の準備において、現存する資料の価値に心を動かされた三越社長岩瀬英一郎が出資を申し出たことによる創立一〇〇年記念事業の一環としての福沢記念館計画。⁽¹²⁾しかし一九六三年、岩瀬の急逝により立ち消えとなった。当時の慶應義塾は校舎の建設による戦災復興が最優先であり、それをこの創立一〇〇年を機会とした建設事業資金募集で果たしたが、財政状況は依然厳しく、岩瀬を失った後は記念館計画の実現を独自に継続することは困難だったと考えられる。⁽¹³⁾

④ 石川忠雄塾長時代、一九八三年の創立一二五年記念事業としての福沢研究センター発足。⁽¹⁴⁾その設立趣意書には次のように記されている。

問題は、義塾の文化財ともいべきそれら〔福沢・塾史関係資料〕の貴重な資料が、その保管に遺漏な

き配慮が払われているかどうか、また福沢研究の上での便宜供与の体制が整っているかどうか、さらに塾内外への所蔵資料の公開展示が適切に実施されているかどうか、となると多くの疑問が残る。率直に言って、それらに関する義塾の対応は、他大学に較べてもいささか立ち遅れているといわざるを得ない。創立百二十五年の記念事業の一つとして、福沢研究センターの設立を意図したのも、それらの不備を補うためである。

これを機会として福沢研究の拠点として多面的な活動が開始されたが、一方で右の目的を達成するための施設や体制整備はその後十分なされなかった。⁽¹⁵⁾それは狭隘なキャンパスや既存施設の中で、福沢・塾史を積極的に発信することを優先する機運がなかったことを示している。

⑤鳥居泰彦塾長時代の一九九七年、高橋潤二郎常任理事を中心にバーチャルミュージアム構想が浮上した。その際、福沢研究センター、アート・センター、文学部民族学考古学専攻、幼稚舎が、資料所蔵状況を報告し、実物展示のための施設を要望したが、結局バーチャルミュージアムともども実現しなかった。⁽¹⁶⁾当時の義塾当局においては、デジタル技術を使って発信するコンテンツが必要だったのであり、物理的な文化資源の発信（展示）には関心が無かったことをこの経緯が示している。

⑥安西祐一郎塾長時代、創立一五〇年記念建設事業において、ミュージアム機能を校舎に収容する等の議論が浮上した際、福沢研究センターが、図書館旧館をミュージアムとし、アート・センターと福沢研究センターを建物内に収容する構想案をまとめたが、二〇〇九年塾長交代で具体化せず。⁽¹⁷⁾また、一五〇年事業で建て替えられた新南校舎（二〇一一年竣工）に展示スペースを設ける案も検討され、そのための寄付も

あったが、教室不足への対応が優先され、寄付の用途は、卒業生のためのサロン「社中交歓万来舎」の設置に変更された。¹⁸⁾この時も、校舎の更新の必要性が先にあり、展示は可能性が検討されたに留まる。

以上の経緯において、慶應義塾当局が、積極的に実物資料の展示機能の必要性を認めていたのは、①②だけであり、他は基本的に塾史に携わっている者や外部からその必要性が主張され、組上に上がったに過ぎないということがわかる。②③④⑥は、いずれも他の施設設置が優先され、展示施設が優先課題と考えられなかった。したがって、これまで最も展示施設の開設実現に近かったのは①の一九三七年の計画であったといえう。

ではなぜ、一九三七年に最も実現に近づき、それ以降は最優先課題となり得なかったか。それは、まさに時局が、福沢の思想や慶應義塾史の学内外での積極的な共有を必要とした時期だからに他ならない。逆に②③⑥は、慶應義塾が私立大学としての一定の位置をすでに持ち、理念の発信への投資の優先度が低いと考えられた時代だったといえるのではないか。学内が無関心であることは、必要性の切迫度が共有されていないことを示している。一方で、③の寄付が実現していれば財源の確保により実現可能性は高かったであろう。

では清家篤塾長時代の二〇一五年に方針が浮上し、長谷山彰塾長に引き継がれ、二〇二二年に実現したのはなぜか。それは、他大学の美術館・博物館設置の機運への慶應の出遅れが明瞭化し、その危機感を共有する文化資源を所蔵する学内の諸部門の連携が深まり、共同歩調を取って学校当局への要望の動きが進んだことにある（博物館法の改正に伴う博物館実習への対応の必要もそれを手伝った）。さらに、図書館旧館の建物の免震化を含む大規模修繕工事実施により、建物の用途を本格的に議論できるタイミングであったこと、センチュリー文化財団所蔵品一括寄贈および展示施設のための資金寄付の話が浮上し、文化資源を持つ学内の諸部門が

連携して対応を検討するタイミングにも重なったことなどから、結果的に慶應義塾ミュージアム・コモンズと対をなす形で塾史展示館の設置が実現する運びとなったのである。⁽¹⁹⁾

そもそも福沢は一八六二年の遣欧使節団に参加した際、博物館、美術館、動物園など社会教育の文化施設に高い関心を示して『西洋事情』に紹介しており、一八七三年には早くも慶應義塾内に「ミュゼウム」の設置を画策しているが、適任者を得られずに断念している。⁽²⁰⁾ 実物を示す教育は、福沢の実証的な学問としての「実学」の理念とも合致するものである。

同時に、実証性や合理性を重視する福沢の思想を尊重する姿勢は、福沢や慶應義塾史の展示という行為を忌避する傾向を生む必然性を内包する。なぜならば、展示は多かれ少なかれ展示対象の「顕彰」や「権威」化の色を帯びがちであり、真理探究のためにその対象との距離を適切に保とうとする学問的姿勢と相反する可能性を持っているからである。慶應義塾内に少なからず、このような文脈で、福沢や塾史から距離を取る意識が（おそらく一般的な自校史への無関心以上に）あることは否めない。そしてそれは学問に携わる姿勢として誤っているとは思われない。

自校史の展示は、自校が近現代史上に何らかの価値を持つと考えることが前提であり、その意味で展示対象への肯定的な評価がある程度内包されている点に難しさがある。しかしその評価は、全面的な肯定を必須とするわけではない。⁽²¹⁾ 無価値な教育機関はあるだろうか。一定の価値を有する歴史を公開しないことは、その歴史を語りうる資料を管理している機関として無責任な行為であろう。

この点について考える上で原点となっている筆者の体験がある。二〇〇八年に開催した「生誕一二〇年記念小泉信三展」がそれである。筆者は福沢研究センター着任以前から携わり、実行委員を務めた。わずか二週間

の会期で一万二〇〇〇人の来場者を集め、新聞各紙による報道や行幸啓もあつたこの展示では、小泉信三の戦争や皇室との関わりなど評価の分かれる側面についても、資料を丁寧⁽²³⁾に提示しながら正面から実証的に展示することを強く意識した。これに対して新たな試みとして好意的な評価を多く得た一方で、批判的なコメントも複数寄せられ、創立一五〇年記念事業への対応で多忙な中で開催の必然性があつたのかという声もあつた。⁽²⁴⁾これは、戦争中の塾長であつたこと、マルクス主義批判、皇室との関わりなど、万人に受け入れられ難い性格を多数持つ小泉が、その没後においては特に語りにくい、もしくは忌避される存在となつていた状況下で、一面においては肯定的な評価も示した展示に対する拒絶反応と考えられた。⁽²⁵⁾この経験は、展示する対象との距離の取り方に対して、なお一層慎重な姿勢を筆者にもたらしたことを付言しておきたい。

二 何のために、誰のために

次に展示を何のために、誰のために行うのか、という点について考えて見たい。

まず、第一には、教育目的である。敢えて換言すれば、「啓蒙的」であることを意識した。その対象の筆頭は、現に慶應義塾で学ぶ在学生（小学生→大学院生）であり、それに加えて教職員を忘れてはならない。

近現代史上の自校の位置を示す資料の公開を通じて、自らが在籍する学校の理念や存在意義を考え、ひいては自らの立ち位置を確認することは在学生の学習意欲にも繋がるであろう。

加えて、かつては教職員の多くは慶應義塾出身であり、積極的に語らずとも、知らず知らずのうちに学校の特徴や理念は共有されるものであつたかもしれないが、現在ではそのような状況ではなく、学校の規模も各段

に変化している。その歴史を身内が知る機会も特に積極的に提供されていないことは改めて想起されてよい。

また右目的は、単に学内の教育目的に留まらず、表現の仕方に留意すれば広く一般に共有することが可能なくはない。すでに書いたとおり、それぞれ固有の理念を有する私立の教育機関において、その理念を世に広く問う機会は、基本的に歓迎されるべきものであり、それが本来の理念の実現に近づく行為でもあるはずだからである。その対象は、外国人を含む来賓や来校した研究者、観光客なども念頭に置いた（解説は原則として日英併記とした）。

第二には、研究成果の発表目的であり、研究者や研究者を志す学生を対象とする。最新の研究成果を反映して公開することで、現在の研究水準を示し、さらなる研究を学内外に促す意味がある。ここにおいても評価の問題は注意が必要であり、単なる自己肯定に陥らないよう、展示対象と適切な距離を定めながら、学問的に扱うことは可能であり、重要であろう。

第三には、広報宣伝目的である。右の二つの目的は、結果的に広報宣伝の役割を担うし、右二つの目的を分かり易く示すことは矛盾しない。したがって、受験生やその保護者、一般の方向けに私立としての特徴や理念を魅力的に発信することは、すでに、特に第一の目的に当然内包され、その範囲は国外も視野に入れている。

要するに、「何のために」を検討すると、結論は「誰にでも」を目指すことになる。⁽²⁶⁾

それを実現するために、本展示館では、(1) 言葉遣い、(2) 学内の最新の個別事情の扱い、(3) 多様な要素への出入口を作ること、などに留意した。

(1) 言葉遣い

慶應義塾には、伝統的に特殊な用語法が存在し、それらを多用すると、途端に学外者には（時には学内の者にも）共有しがたい排他的な言語になってしまい、また記述対象との距離について学問的には疑義を生じさせる可能性がある。今回使用に特に注意した言葉は「先生」「塾」「社中」などである。

慶應義塾では、元来福沢のみを「先生」と呼称することが知られているが（大正頃までは、「福沢」さえ冠せずに単に「先生」といえば福沢を指した）、小泉信三もそれに注意を促しているように、それは学問的な態度には映らず、むしろ非学問的態度に映じるであろう。⁽²⁸⁾ それどころか、福沢を神聖視する奇異な文化と捉えられがちである。

一方で、この習わしは「先生」は別として、他は対等な「社中」のメンバーであり、年齢や社会的立場で上下の区別をしない、という思想とセットのものである。つまり教員であろうと、入学したての学生や生徒であろうと、一人の人間として対等に尊重されるという考え方であり、これが「半学半教」「人間交際」など別の慶應義塾のキーワードとも結び付く、実は重要な意味を持っている。慶應義塾の学内者にさえもそのニュアンスは十分理解されていない。社会的な立場や肩書に萎縮せず、同じ学ぶ者同士であるという意識を重視して民間私立で活動する同志としての意識を育んだ慣習の存在は今日的にも意義を有することであろう。そこで福沢のみを「先生」と呼ぶ習わしがあることや、その他の関係者をすべて「君」や「さん」付けで呼ぶことを、むしろ展示の中であえて紹介した（もちろん、展示対象としての福沢には「先生」を用いない）。

「塾」は慶應義塾関係者が慶應義塾を指して言う言葉であるが、⁽²⁹⁾これは内輪感の強く出る言葉であろう。「慶

應」や「義塾」は「慶應義塾」の短縮形として一般に通用する。しかし、「慶應」という短縮形は、むしろ慶應関係者にこれを嫌う者がいる。

慶應義塾の現在の在學生を一体に見る言葉として、「塾生」は重要かつ便利な語であり、少なくとも明治維新前の福沢の塾に学ぶ者は「塾生」以外の何者でもなく、そこからの連続性を示す上でも意義がある。また現在慶應義塾に在学している者にとっては、小学生から通信教育課程の学生や大学院生まで、極めて自然に用いられている言葉であるため、必要に応じて現代まで用いた（「学生」なども併用している）。主として卒業生を指す「塾員」は極力用いないこととした。

「社中」という語もまた、慶應義塾に特有の言葉で、内輪感を醸す言葉であることは否定できない。しかし、「一身独立して一国独立す」と説き、一身から一国へと同心円的に広がる福沢の思想の重要な概念であり、単に学内の問題ではなく、社会における人と人との関係がなすところの人間交際＝社会（society）を展示の中で正面から取り上げる以上、その言葉の意義を取り上げることにした。このように、最良の答えを導いているかどうかというよりは、常に表現には細部まで注意を払うという意識を継続していくつもりである。

（2）学内の最新の個別事情の扱い

これは、特に現在の慶應義塾の一貫教育校や各学部の内容、最新の研究成果などの個別の情報についてのどのように盛り込むかという問題である。本来それらを盛り込むことは、学内の来場者に展示への感情移入や親しみ、関心をもたらす有意義な仕掛けに思われる。もちろん受験生を意識した時にも設置が望まれる内容であろう。しかしそれ以外の者には、疎外感を抱かせやすい上に、総花的で浅い展示になる可能性が高い。また

数年にして陳腐化する恐れがある。

本展示館では、近現代史上の慶應義塾の位置を展示することを主眼とし、現代の個別事情の紹介はかえって原点の精神や本来この学校が求めていたものの姿を、拡散させてしまうと考え、言及はしないこととした。ただし、福沢時代のみでなく、福沢没後の歴史的な歩みも重視する意図で、名称にも「福沢諭吉」だけでなく「慶應義塾史」という語を入れた。したがって、現在の大学事情や各学校の事情を知りたいという要望には応えられない内容となっている。しかし展示に加えたとしても大学だけで一〇学部を擁する学校の規模から考えて中途半端なものとなったであろう。これらは入学案内やインターネット上で逐次更新される最新情報の発信に委ね、展示館の目的からは除外した。

(3) 多様な要素への出入口を作ること

教育機関は社会的な存在であり、多方面との繋がりの中に存在している。そのことを示すためには、学校から学外へ多様に社会的な展開が広がっていること、様々な入口から慶應義塾史に繋がっていることを表現するべきである、ということを意識した。

このことを端的に示すのは次の二つの展示である。

一つは、デジタルコンテンツの「社中 WHO's WHO」である(図1)。慶應義塾は飽くまでも人間の社会活動の基盤となる学問を授けるに留まり、その後の社会における応用は個人に委ねられている。したがって、学側が提供した特定の学問分野ではなく、多様なジャンルで活躍する多彩な人物を紹介することに意義があることとなる。この発想は、塾長等の役職者や著名人など特定の数名ではなくできるだけ多くの人物を並列的に



図1 社中 WHO's WHO

タッチパネル式の大形ディスプレイにランダムに人物が登場する。

紹介するという仕掛けの構
想へと繋がった。福沢もそ
の中の一人として扱い、こ
の仕掛け自体が「社中」と
いうコンセプトを可視化す
るものとなった。

もう一つは、「福沢論
吉・慶應義塾が深く関わっ
た日本各地の学校」の展示
である(図2)。慶應義塾
による他の多くの学校の創
立・運営の支援を示したも
のだ。これは一面では、傲
慢に映る可能性もあるう
が、学問探究や教育理念の
共有、確認等の意味で、有
益なことと考える。一八八
七年以前を目安として約三

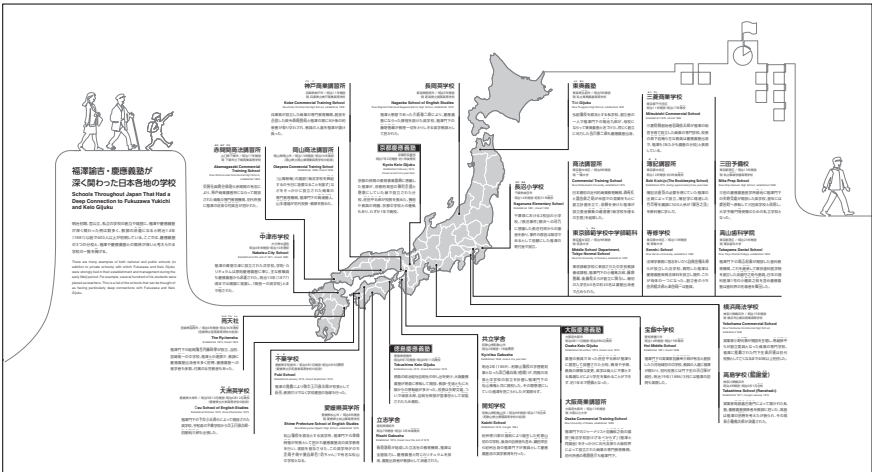


図2 「福沢諭吉・慶應義塾が深く関わった日本各地の学校」の展示

十校を日本地図上に配置して示している。知的伝統の広さを示すのは、世界の大学との協定や交流の数だけではないはずである。

これらの展示は、何らかの結論を示すものではなく、多様な方面へと来場者の関心を繋ぐものである。結局、展示の目的は、教育機関、特に大学の可能性の広がりを意識することということが本節の結論である。色々な価値を包羅する機関が大学である。その可能性を歴史展示という行為を通して最大限示すことを試みたつもりである。

三 何を展示するのか

前節に示した目的を達成するためには、展示物の間口を広げ、理念に沿う展示をできるだけ自由に行う必要がある。展示を拘束する事情にはどのようなものがあるだろうか。学校当局の意向、展示品に利害を持つ有力者の存在（たとえば大口の寄付者や寄贈者、子孫など）、資料の保存状況、法的な規制（著作権、個人情報など）、公序良俗に

反しないことなどが挙げられる。

(1) 個人に関する情報の扱い（入学記録、成績表、卒業生名簿）

主題と大きな関係を有する点として、個人に関する情報の出し方という問題は、現在極めて大きい。入学記録、成績表、卒業生についての情報をどの程度出してよいのか、ということについては、こんにちでは非常に慎重でなくてはならなくなっている。

しかし、多くの若者の学び舎に関する展示である以上、個人を特定して展示できるかどうかは、展示の内容とそのままたらず効果に直接的に影響する重要な問題である。したがって、個人（基本的には物故者）の情報を無条件に全面的に回避することは避けたい。

この点慶應義塾においては、多くの記録を影印本やマイクロフィルムによってすでに公にしていたことが幸いした。慶應義塾の最も基本的な資料である初期入学者の記録は、入社帳と呼ばれ、かつて慶應義塾監局塾史資料室によって当初活字で、次いで慶應義塾福沢研究センターによって現存する三〇冊に及ぶ記録の全てが五冊の影印本によって刊行された。⁽³¹⁾

また明治四年から明治三十一年までの成績表（勤惰表、勤怠表などとも呼ばれる）は、全在学生の成績が掲載され、全員に配布されていた上、マイクロフィルム版「福沢関係文書」の中に全て収録されており、公共図書館等で閲覧が可能な状態となっている。⁽³²⁾『慶應義塾塾員姓名録』『慶應義塾塾員名簿』などの名称で呼ばれる卒業生名簿も、明治末年を下限としてこのマイクロフィルムに収録されている。

以上の状況から、入社帳、成績表、卒業生名簿は、本展示館においては既に広く公開されている情報と理解

しうる範囲ではこれを展示対象とすることとし、実際に開館時の展示品に、「慶應義塾入社帳」や、「慶應義塾勤務表」を加え、後者においては、小林一三や岡嘉太郎などの成績を明示した。ただし、特に成績表については、当時から公開情報であったことなどをキャプションで明記した。

資料の寄贈を受ける際、必ず資料の公開に承諾を得、必要であれば条件を付してもらうよう徹底しており、全員に公開されていない時期の個人の成績表などについても、今後記名のままで展示が可能となるように留意している。

寄贈者の氏名等も、寄贈時に特段の留保がない場合には基本的には表記することとした。これについても、寄贈の際に明示的に承諾を得ており、承諾を得ていない時期のもので改めて確認することができないものも、五〇年以上の経過を目安として基本的に寄贈の記録に基づいて表記した。したがって、一〇〇年以上前の寄贈品も、本年の寄贈品も同様の表記で寄贈者が記載されており、その寄贈名義自体が資料の性質や重要性を考える上で有用な情報と考えている。

(2) 個人に関する情報の扱い（戦没者情報）

個人の情報という点で大きな決断は、「慶應義塾関係戦没者データベース」の公開である(図3)。これは「戦後五〇年」の時期より経済学部教授白井厚(現名誉教授)により長年にわたって調査が継続され、それを福沢研究センターが引き継いで更新しているデータである。⁽³³⁾その公開項目は氏名、陸海軍・軍属の別、戦没年月日、戦没地、卒業年月(在学中の場合は最終学年)、学部(もしくは慶應での最終学歴)、所属クラブであり、これらは会場内限定であるが来場者が検索可能である。また個別の表示項目とは別に、戦没時の戦闘名称

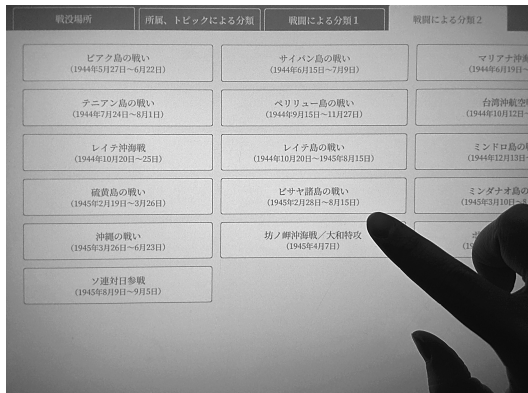
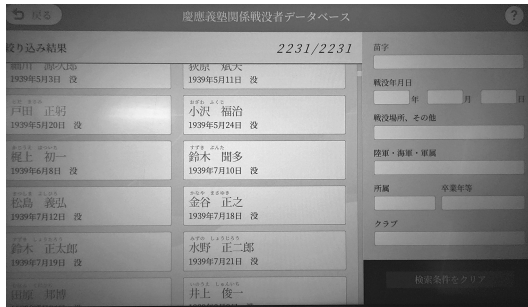


図3 「慶應義塾関係戦没者データベース」検索画面

等（アッツ島の戦い、インパール作戦等）、その他の特筆すべき事情（特攻死、BC級戦犯による法務死、シベリア抑留死など）も検索可能としている。

戦没者調査は、多くの学校で行われているが、氏名の公開には慎重な対応が多く、氏名を伏せ、番号に変えたり、イニシャルに変更したりする例が見られる⁽³⁴⁾。

慶應義塾関係戦没者の情報の公開は、こういった流れからすると

逆行するもののように映るであろう。しかしこれは白井の調査法が、判明した戦没者の名簿を公にし、漏れている者の情報を集めるというものであり、繰り返し名簿が配布され、最終版は慶應義塾福祉研究センターの資料集として二〇〇六年に出版され、現在も頒布されているという状況を反映したものである。

慶應の戦没者調査の特徴は、狭義の学徒出陣（在学のまま徴兵された者。特に一九四三年一二月の一斉徴集による者）以外の卒業生や中退者、教職員についても幅広く対象に含めている点にある。戦没者の具体性の公開は、近代日本が行き着いた一つの帰結を具体的に示す重要な展示資料として不可欠と考え、これを詳細に公

開することが、近代史研究にも資すると考えた。これは卒業生の捕捉率が高く、戦前から規模も大きかった大学としての責任でもあると考えるものである。

筆者が強調したいのは、歴史の解明に個人を特定する情報は一定程度不可欠のものであることは言うまでもないことであり、同時に現在生きる人々の権利を、その情報を公開することによって毀損するようなことがあってはならない。しかし、それを学術研究のためにできる限り共有していくことを担保するためにはその研究環境を醸成する「展示」という行為において、説明責任を果たしながら、消極的過ぎないことが必要なのではないかということである。常に慎重さと緊張感を持ちながら、有名無名の個人の存在を尊重する展示としていきたい。慎重すぎる選択をとることは、結果的にはその描き出す歴史の意義やプレゼンスを下げ、他の情報へのアクセスさえも閉ざしやすい環境を醸成していくことになってしまうと思われるのである。

(3) 異論の展示

福沢を展示するに当たり、福沢に対する多様な議論の一端を積極的に示すコーナーを設けた。これが「ホラを福沢、ウソを諭吉」のコーナーである(図4)。この展示はその内容に加え、その存在自体が、実は福沢が提起した「多事争論」という重要な概念を示す展示でもあり、時系列の展示の中に含まれる演説や討論、万来舎、交詢社などの紹介とも響き合うものとなっている。福沢が説いた価値である「自由」は、『文明論之概略』において「自由の気風は唯多事争論の間に在りて存するものと知る可し」とあるように、展示自体がその自由を身をもって示さねばならないと考えた。もとよりあらゆる批判を紹介することは難しく、また慶應義塾史の展示館であることから、必要なことでもない。また、この展示の趣旨は福沢を一方向的に貶めることでもない。

料はレプリカを併用する。

以上、本展示館の特徴をなす展示の意図は、福沢の価値や慶應義塾の歴史的意義の結論を示すのではなく、歴史上の様々な顔を提示することで、最終的にはその評価を来場者に委ね、「考えてもらおう」ことを主眼としているものである。

四 塾史展示館の概要

以上の検討を踏まえて開設された塾史展示館の概要を示しておきたい。

本展示館は、慶應義塾三田キャンパス内の慶應義塾図書館旧館二階の旧大会議室（二八〇・四四㎡、当初は大閲覧室）を常設展示室に、旧小会議室（六〇・九九㎡）を企画展示室に改装した。

展示館は、福沢諭吉と慶應義塾という二つの大きな主題を持つ。最初は、福沢と慶應の二つをそれぞれ時系列のストーリーとして展示する構想であった。⁽³⁵⁾ 最初に行ったことは、両者のキーコンセプトとなっている言葉とそれを示す具体的な資料をいくつか挙げ、それをストーリーとして組むシミュレーションを行うことであったが、両者が分かちがたく絡み合っていることから、一つの時系列の展示に福沢と慶應義塾の両方の内容を不可分一体のものとして取り上げることへ変更した。そうすると、慶應義塾の範疇からはみ出す福沢の社会的活動の位置づけが難しくなると思われる。例えば『学問のすゝめ』などの著述は、慶應義塾史上の活動とするのは、やや不自然だが、交詢社や『時事新報』等と同様に、社会教育・発信の一環という位置づけとすれば、三

田演説会などの紹介と親和性を持ち、自然に展示に盛り込むことができた。

ただし、どうしてもうまく取り込めなかったのが、福沢の人間観、男女観、家族観、家庭教育といった、人と人の関係性がいかにあるべきか、というテーマである。そして実はこのことが、学校教育に展開されたところに学風が形成される。慶應義塾における学風は、自然に形成されたものではなく、本来は極めて自覚的なものであり、それを展示することは、慶應義塾史において重要な位置を占めると考えられるが、現在では無自覚で薄れゆく存在であるため、時系列の中で分散させるべきではなく、むしろテーマで切り取ることが、その意義を意識させると考えられた。その結果福沢・慶應義塾史を時系列で展開する一―三章に続いて、四章として入れることとした。その章立ては次の通りである。なお章番号は明記せず、どこからも見られるようにした。

颯々^{さつさつ}の章（第一章）

智勇の章（第二章）

独立自尊の章（第三章）

人間交際の章（第四章）

「颯々」は「*やつやつとやる*」の「*やつやつ*」で、『福翁自伝』に頻繁に使用されているキーワードであり、物事に拘泥せず、活発に軽快に行動する福沢のメンタリティーを示す語として採用した。

「智勇」は「智勇兼備」といった場合の智＋勇という並列関係とは異なり、智を基礎とした勇、つまり蛮勇や武勇ではない智勇を意味する、やはり福沢の重要なキーワードと位置づけた。

「独立自尊」は言うまでもなく、福沢が掲げた理想の人格のことである。

「人間交際」は *society* に対する福沢の訳語であり、近代社会における独立した個人と個人の交際によって社

会が形成されることを意識した福沢の造語である。

これらはいずれも福沢が提起した問題と密接な関係を有するキーワードであり、展示空間の各所に散在している「言葉」の展示と響き合いながら、一つのメッセージを紡ぎ出すように設定されている。

以上のような福沢の思想と慶應義塾の理念と沿革に関する展示内容以外で、盛り込みたいものとして挙がっていた項目には、次のようなことがあった。

①建物自体に関する展示

慶應義塾図書館旧館は曾禰中條建築事務所の代表作とされ、国の重要文化財にも指定されている。福沢や慶應義塾史に関心はなく、ただ建物の内部を鑑賞したいという来場者が想定される。

②福沢論吉に対する多様な見方の展示

前節（3）参照。

③慶應義塾に関連する多様な人物の展示

第二節（3）参照。塾長や学部長などの顔写真を並べる展示は意図して採らないこととした。

④三田キャンパスの空間としての歴史性を示す展示

在学した者にとって校舎は懐かしいものであるが、思い出がない者にとっては個別の校舎の説明は案外関心を持たれないものである。その一方で、展示館が所在する三田は、慶應義塾が最も長く所在している象徴的な歴史的空間であることを視覚的に意識させたい。

以上の①～④に対応するために次のような展示を構成した。

①慶應義塾図書館の歴史

トピック展示として設置。建物の歴史を解説と実物資料で展示する。それに加え、建物自体を展示物として捉える横総合計画事務所の間デザインが採用されたため、⁽³⁶⁾歴史的空間が見渡せるようになった。当初筆者は撤去を想定していた一九八三年に設置された横事務所デザインの大絨毯は、洗浄の上で再設置され、会議室時代の歴史も継承する展示空間となった。

② ホラを福沢、ウソを論吉

トピック展示として設置。近年の研究状況や論争を取り上げる余裕はないため、福沢に向けられた同時代人の批評や実物資料を展示する。肯定的な評価に加え、否定的な評価もこの展示に加えたことについては前述の通りである。

③ 社中 WHO'S WHO

前述したように、できるだけ多様な人物が並列的にランダムに紹介されることを意図してアプリを開発し、大型モニタで設置した。拡張性を持たせ、内蔵する人物を追加できるようにし、開館時には三〇〇名⁽³⁷⁾程度を展示。現存者を加えると追加要望などが生じる可能性がある⁽³⁸⁾ので、物語者に限定する運用とする。

④ 関東大震災直前の三田キャンパス模型

およそ百年前のキャンパス全体の精巧な模型を作成し、その土地に関心があるかないかによらず、模型として魅力のあるものとする。また現在との対応関係や建物のその後の運命を丁寧に展示することで、戦争や高度成長期などへも視点を広げられる工夫をした。復元年代は、福沢存命中の雰囲気を残し、現在との連続性も確認でき（展示館建物がある）、最古の航空写真がある時期から設定した。

このようにして、四章立てのメイン展示と、二つのトピック展示、さらにそれを補完するデジタルコンテンツや模型によって、時間軸と空間軸、人的な繋がりなどが有機的に構成されるよう展示を構成した。また、福沢を原点として歴史が今日まで紡がれ、連続していることを示唆するため、デザインをイントロダクションから最後の囲み記事に至るまで一筆書きとなるようにした。

展示内容の構成を図示すると図5のようになる。

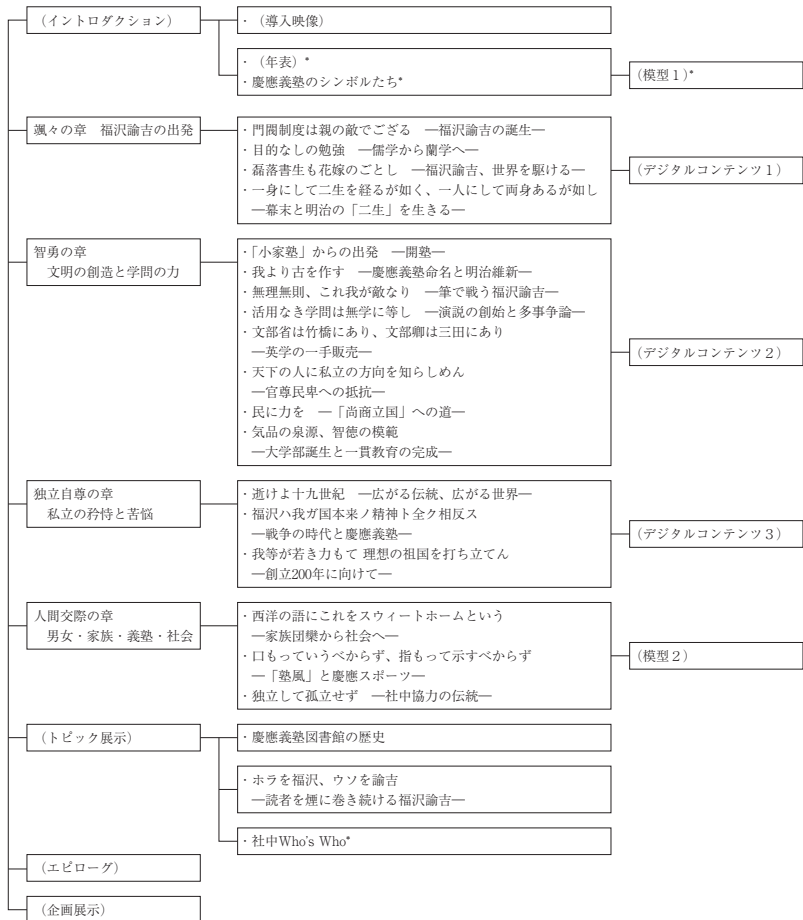
おわりに

自校史の展示は、決して懷古趣味的な一部の人たちのための消極的行為ではない。一方で優秀な人材を獲得するためだけの自己宣伝という積極的な行為でもない。

教育機関にはそれぞれの価値と蓄積があり、そこに入学して学んでもらったり、様々な形で協力してもらうことによってその営みを持続し、その価値をさらに高め、社会の発展に資することができる。展示はその営みを末永く活発に持続するための装置であるとすれば、学校の規模や価値を置くポイント、アクセントは様々であろう。慶應義塾においては今回、原点の精神との連続性を重視したが、大学の個性により現在進行中の最新のテーマを更新しながら扱うことも可能であろう。より実践的な内容を扱うなどの方向性もあろう。

学校史展示という行為は、常に広報宣伝的な意義づけを同居させているものであり、批判にさらされることの少ない身勝手さ、独りよがりにも陥る可能性を多分に持っている。一方で教育機関としての原点や理念を確認し、その関心対象者の幅を広げていくことを意識し、現代社会の多様な視点や問題へと原点の理念を接続する

図5 慶應義塾史展示館展示構成図



* … 章立てに拘束されない展示

空間デザイン：権総合計画事務所

展示設計・制作：株式会社トータルメディア開発研究所

ことができれば、その展示は、重厚な歴史展示でありつつ、学内外における最前線のトレンドにさえなりうるであろう。その意味において、学校史展示は常に自戒を継続し、節度ある積極性を模索していくべきではないだろうか。

注

(1) 筆者は学術論文において、固有名詞についても基本的に新字がある場合は新字を用いることを原則としているが（記述対象との距離を公平に保つ姿勢を示すため）、本展示館は、慶應義塾内の広報の表記統一ルールに従い「福澤諭吉記念慶應義塾史展示館」という表記を採用した。本稿は本誌の表記統一基準により、「福沢」「慶應義塾」と表記する。

(2) 立教学院展示館ホームページリード文、<https://www.rikyo.ac.jp/research/institute/hf/>（最終アクセス日：二〇二一年二月一六日）。

(3) 広田勝一「創刊にあたって」『立教デイスプレイ——立教学院展示館年報』創刊号、二〇一六年、一頁。寺崎昌男「展示館——誕生とこれからの物語」同、三—四頁。

(4) 鎌田薫「刊行にあたって——過去・現在・未来を紡ぐ——」『歴史館でたどる早稲田大学』（早稲田大学出版部、二〇一九年）、一頁。

(5) 田中優子「館長」挨拶、<https://museum.hosei.ac.jp/kancho/>（最終アクセス日：二〇二一年二月一六日）。

(6) たとえば、瀬戸口龍一「地域と大学を結ぶ——大学史資料活用の広がりを探して——」『大学史資料の活用と展示』（全国大学史資料協議会、二〇一四年）、二四頁以下における「大学史活動は広報活動か・研究活動か？」という問いかけ参照。また、谷ノ内識「大学史を視覚的に見せる 展示施設の広報的役割」『広報会議』、二〇二〇年九月。

(7) この問題については拙稿「八十数年越しの展示計画——福沢諭吉記念慶應義塾史展示館開設へ」(『三田評論』、二〇二〇年八・九月号)、八〇—八三頁、同「慶應義塾史展示館開設までの私的総括」(『慶應義塾福沢研究センター通信』第三四号、二一七頁に比較的詳しく記述したので、ここではそれを補完する情報を中心に記述する。

(8) 「懸案の文化博物館三田山上に新設 研究室と同時起工か」(『三田新聞』(一九三七年五月一五日)。この計画は『慶應義塾百年史』には記載がないが、当時義塾職員であった昆野和七の「生誕150年記念事業として「福沢記念館」の建設を望む」『慶應キャンパス』(一九八一年一月二〇日)によれば「福沢ミュージアム」と呼ばれていたという。

(9) 一九三七年度より採用された陸軍予科士官学校の国史教科書『本邦史教程』に福沢を天皇親政の本旨を揺るがせる功利主義思想の導入者として非難する記述が登場している(本書は開館時の本展示館常設展示にて展示)。また一九三八年度より文部省教学局による思想統制への対応として、文学部に「明治文化史」の講義を設置し、福沢および慶應義塾史の講述を行った(『慶應義塾百年史』中巻後、慶應義塾、一九六四年、八〇九頁)。これらは、展示が時局への対応という側面を持っていたことを示唆する。

(10) この時のキャンパス整備計画に伴って建設が実現した唯一の校舎が現在の第一校舎(一九三七年竣工、曾禰中條建築事務所設計)である。

(11) 前掲昆野「生誕150年記念事業として「福沢記念館」の建設を望む」。なお、予定地は福沢邸跡地に定められ、その場所は記念館用地としてその後も手つかずで残されたという。

(12) 「百年祭の計画をみる 福沢記念館、銅像の建設も」(『三田新聞』、一九五七年八月一日)。また、前掲昆野「生誕150年記念事業として「福沢記念館」の建設を望む」。ただしこのことも『慶應義塾百年史』には言及が見当たらない。なおこの時のものと思われる記念館の素案が慶應義塾管財部工務課倉庫に残されている。

(13) 当時の義塾は、一九六四年発足の財団法人福沢記念育林会の設立目的(将来の資産のために植林を行う)や、松永安左エ門の美術品コレクションを受贈できなかった(施設整備が条件だった)と伝えられていることなどが示唆する

ように、厳しい財政状況にあった。それが一九六五年の学費値上げを巡る学生運動の遠因ともなった。

- (14) 「慶應義塾福沢研究センター設立趣意書」(『三田評論』八五八号、一九八五年四月)、一一三頁。

- (15) 全学的な研究機関という位置づけは実現したが、資料の保管、公開、展示のいずれも十分な整備は進まなかった。今回展示館計画では資料閲覧のための機能を必須のものとして付随させていたが、途中でそのためのスペースは喫茶店に変更されてしまった。

- (16) 福沢研究センター教授西澤直子氏の御教示による。この計画はHUMI (Humanities Media Interface) プロジェクトによる、グーテンベルク聖書のデジタル化作業と同じ流れで議論されたものと考えられる。「世界のグーテンベルク聖書デジタル化が始まる」(『三田評論』一〇〇八号、一九九八年二月)、一〇二頁。

- (17) 同じく西澤直子氏の御教示による。

- (18) 筆者自身の記憶による。寄付者は連合三田会会長だった服部禮次郎氏で、社中交歓万来舎の入口には、服部氏により命名されたことだけが表示されている。

- (19) この経緯について、前掲「慶應義塾史展示館開設までの私的統括」、長谷山彰「福沢諭吉記念慶應義塾史展示館と慶應義塾ミュージアム・コモンズのグランド・オープンによせて」(『三田評論』一二五五号、二〇二一年五月)参照。

- (20) 中上川彦次郎宛福沢諭吉書簡(一八七三年七月二〇日)、『福沢諭吉書簡集』第一卷(岩波書店、二〇〇一年)、二六七頁。

- (21) 立命館大学国際平和ミュージアムでは「平和と民主主義」を理念に掲げた戦後の立命館の精神を基礎として、戦前・戦中の立命館の時局への対応を否定的に評価し、自校の歴史を展示に織り込んでいる。自校史の否定的評価が理念の追求に結びつく例である。

- (22) 『慶應義塾創立一五〇年記念誌』(慶應義塾、二〇一一年)、五三―五四頁。

(23) この展覧会で刊行された図録『生誕一二〇年記念小泉信三展』（慶應義塾、二〇〇八年）は完売し、改訂され、山内慶太・神吉創二・都倉武之編『アルバム小泉信三』（慶應義塾大学出版会、二〇〇九年）となった。

(24) 学内での受け止めの難しさについては、小室正紀「生誕一二〇年記念小泉信三展」を開催して」（『三田評論』一一一五号、二〇〇八年八・九月）七二―七三頁、同「慶應義塾創立一五〇年と福沢研究センター」『早稲田大学史紀要』第四〇号（早稲田大学大学史資料センター、二〇〇九年）、一〇頁。アンケートにおける展示に対する批判は、戦時中の小泉の戦争協力を批判するものが主であった。

(25) 小泉に関する研究は当時学内外でほとんど行われておらず、無関心というよりむしろ忌避されている感があり、筆者は調査や展示の活動に参加しないように進言されたこともあった。一方で、この展覧会は学内外における小泉研究を振起した側面があり、象徴天皇制研究においては、この展覧会で発掘された資料「御進講覚書」が最重要資料の一つとなっている。

(26) 前掲拙稿「八十数年越しの展示計画——福沢諭吉記念慶應義塾史展示館開設へ」で、「観光スボット」という表現を用いたのはこのためである。

(27) 小泉信三「福沢諭吉と福沢先生」『小泉信三全集』第一五巻（文藝春秋、一九六七年）、二九七―三〇〇頁。また、小室正紀「福沢諭吉との間合い——福沢研究センターの講義」『三田評論』一一一三号、二〇〇八年六月）三四―三五頁。

(28) 筆者は過去に卒業生向けのある講演で、福沢諭吉を「福沢先生」ではなく「福沢」と呼んだことを、公衆の前で高額の質問者から厳しく叱責されたことがある。これは慶應義塾関係者の一部にとっては案外デリケートな問題であることは、今なお事実である。

(29) 拙稿「慶應義塾“塾語事典”塾（じゅく）」（『三田評論』一二三三号、二〇一九年五月）、一一四頁。

(30) ここでいう「個人に関する情報」とは、法的保護の対象としての「個人情報」（『個人情報保護法』第二条）ではな

く、主として物故者の情報である。ただし学校法人としての個人情報基本方針・保護規程での扱いは大学によって物故者まで同様としている場合もある。

- (31) 『慶應義塾入社帳・調査資料集』（塾史資料室文献シリーズ2―6）、慶應義塾塾監局塾史資料室、一九七八―八三年。慶應義塾福沢研究センター編『慶應義塾入社帳』一一五巻（慶應義塾、一九八六年）。なお、この原資料にはわずかに身分に関する記載があり、それは刊行の際に削除されている。

- (32) 慶應義塾福沢研究センター編『福沢関係文書 福沢諭吉と慶應義塾』全二四〇巻（雄松堂フィルム出版、一九八八―一九八）。

- (33) 白井厚監修『太平洋戦争と慶應義塾』の軌跡』（二〇一六年）、二九六頁。

- (34) 明治大学史資料センター編『戦争と明治大学——明治大学の学徒出陣・学徒勤労動員——』（明治大学、二〇一〇年）は、氏名を省略して戦没者を公表した最初の例であろう。

- (35) 筆者が草した「塾史展示室（仮称「コンセプト案」）（二〇一八年一月二二日付）では、展示基本方針として「A 福沢諭吉の生涯と、B 慶應義塾の歴史を常設展示対象とする。」「C 企画展示（最新研究や新規寄贈資料の紹介、周年行事（クラブ等含む）等と連動したものなど）のスペースを設け、常設展で表現できない内容や折々の必要に対応する。」とある。

- (36) 当初の機事務所案では、外光を取り入れるアイデアであったが、遮光性の高いレースの上に、さらに遮光性の高いカーテンを用いる案に変更した。空間のデザイン性と資料保存の観点を折衷させた結果である。

- (37) 人物は『慶應義塾史事典』（慶應義塾、二〇〇八年）、『福沢諭吉事典』（慶應義塾、二〇一〇年）の人物項目収録者を基礎に収録した。

- (38) なお社中 WHO's WHO のコンセプトは、慶應義塾大学 DMC 研究センターの研究プロジェクトであった MoSaIC (Digital museum for context networking) プロジェクトで検討された「デジタルデータを関連付ける文脈表現のデジタ

ル化」(<https://www.dmc.keio.ac.jp/projects/MoSaI/index.html>) の考え方を基礎とした。特に、筆者も参加した、平成二五年から二九年度にかけて私立大学戦略的研究基盤形成支援事業におけるプロジェクト「文化財コンテンツのデジタル表象環境に関する統合的研究拠点の形成」を活かしている（成果報告書 <https://www.dmc.keio.ac.jp/projects/comp/leled/senryaku/senryaku201803.pdf>）。